

## 千里山短信

十八回生 口羽竜二

同郷者を引き寄せるふるさととは何でしょうか。ふるさとを想う気持ちはどこから来るのでしょうか。思うに、幼い日の原風景と原体験が心に焼きつく強い刷り込みとなり自分の一部となっているからでしょう。だからふるさとがたとえどれほど住みにくい場所でも、そこに生まれ育った人にとっては心休まる場所なのです。あの三宅島の人たちの気持ちもよくわかる気がします。誰がいつたのか、「ふるさととは遠きにありて想うもの」でした。遠い沖縄出身の人たちの愛郷心が強いのもうなずけることです。夏川りみの歌には望郷の気持ちがいこめられ、聴く者の心にしみ入るようです。心に残る千里山の原風景はもう探すのもむづかしくなりました。むりもないことです。木造の家屋は百年ともちません。そうでなくても都市は生きものですから世代交代とともに変貌を遂げていきます。私の両親は千里山では第一世代の住人でしたが母も二年前に九六歳で他界しました。同世代の方はほとんど残って

おられないと思います。第二世代の私たちもすでに老境にあり、いまは第三世代の時代といえるでしょう。

私は千里山で生まれ育ちました。定年まで勤めた大阪の会社では転勤も単身赴任もなく、千里山で三二年、西宮に三年、そして大阪万博の一九七〇年に千里ニュータウンに住み着いて三六年になります。まだ若い頃千里山北方の山野をサイクリングで走り回ったものです。その山野が開発されて千里の名を冠するニュータウンとなり、そこに長年暮らしてみるとここが自分のふるさとのようにさえ思えます。千里山に隣接する農村であった佐井寺、山田、下新田、上新田はすっかり都市化の波にのみこまれ、農村の面影はまったくありません。考えてみると、大正末年に開発された千里山はこの地域の開発のはしりであり、まわりからは高級住宅地とみなされひとつのアイデンティティがありました。それもいまはぼやけてしまいました。日常車で走っているとこの地域のいまの姿は千里山が膨張したものだといえなくもありません。私にとってはこの地域全体がいわば大千里山という感じです。とりとめのない話になりましたが、ここで先ほど触れた千里山の原風景を探ってみようと思います。

駅の東側の旧住宅公団による千里山団地は、昭和三十年代に千里山再開発のはしりとして造られました。この団地もその後はすっかり千里山の風景としてなじんで半世紀近くになります。建物はさすがに老朽化が進み、一部ではすでに八階建ての住棟に変わっています。しかし開発当時に植えられた桜もいまは幹の直径が四、五十センチに及ぶ大木に成長し住心地の年輪を感じさせます。私たちが通った母校千二小学校ですが、残された校舎ひと棟は、一時は外部から斜材で支えられるという哀れな姿でした。既報のとおり平成一五年に校舎北側に三階建ての吹田市立千里山佐井寺図書館が開設され、校舎はこの図書館の一部として生まれ変わりました。建物内部は耐震補強とともに用途に応じてすっかりリフォームされたものの、外部は新しい板材でほぼ原形どおりに修復され、サッシュも木製という念の入れ方で、古い木造校舎が大切に保存されているのはうれしいことです。建物の前にフェンスはありませんが二本の石の門柱だけは残され、大正一五年と刻まれています。

駅前を上がるとおなじみの噴水ですがこの噴水もすでに三代目で、ここには千里山開発記念碑があります。

で残っているものはほとんどありません。千里山をくまなく歩いたわけではありませんが、とにかく残っているのは十数棟というところでしょうか。それらのデザインには昭和モダンともいえるべき洋風と和風の二種類があつたように思われます。私が育つた家もそういう洋風の分譲住宅のひとつで、外壁の下部は黒っぽい板張り、上部は漆喰で屋根には煉瓦色のセメント瓦が載り、建具は白いペンキ仕上げでした。しかし後の増改築で原形はまったく失われました。

明らかに注文住宅と思われる立派な邸宅がいまも当時の姿で残っています。噴水から南へふた筋目の角にあるものと柿崎邸がそれで、後に伊達さんが住まわれ、現在は黒田邸です。これもひとつの昭和モダンですが特筆すべきは、メンテナンスが実に行き届き時代を感じさせても老朽化は感じられません。この家はとても大切にされているのです。十数年前にこのお宅でテレビドラマのロケがありました。筋向かいの私の実家が出演者の休憩所にあてられました。ちょうど休んでいた大原麗子に私の母があつかましくカメラを向けたので、その折の写真が手元にあります。さて黒田邸の前を上がり、次の五叉路を左へ上がりきって広い道に

故千里山人の千里山開発物語に詳述されていますがこの碑文によれば、開発計画は大正九年に始まり事業は八か年を要したとあり、総面積一六万坪、総戸数は四〇〇戸だったことがわかります。そしてこの事業を進めた大阪住宅経営株式会社は事業を新大阪鉄道に譲渡し、会社を解散するにあたりこの記念碑を建立したと記されています。昭和三年十一月のことでした。多くの会社関係者の名前も記されていますが、八〇年後のいまもどなたか子孫の方が千里山に住んでおられるかもしれません。

余談になりますが、一六万坪という当時としては大規模な開発だったと思われれます。大きいだけでなく道路を幹線道路と細街路に分け、ロータリーを二箇所に分けるといふのは当時としては新しい計画手法だったかもしれません。四〇〇戸というはおそらく分譲戸数で、これに必要な土地面積は道路も含めて多く見積もっても四万五千坪ですから、他に宅地分譲もあつたと思われれますが、数万坪は当初は手をつけずに残されていたはずで。

ここからは個人的興味になりますが、昭和初期の住宅というのはいかなるものであったのか、完全な形

出ると左側に林邸<sup>2</sup>があります。このお家も屋根にスベイン瓦を乗せた堂々たる昭和モダンで、昔のままの姿でいまも林家のお住まいです。ふつうの住宅としては和洋合わせて数軒があります。洋風住宅としてはほぼ昔の姿をとどめているのは、噴水近くの木下邸、熱田邸、幼稚園に近い河崎邸、村川邸、藤井邸<sup>6</sup>があります。特に藤井邸は軸を東西にした切妻の大屋根で、南向きの妻面から採光するというデザインに当時の設計者の意気込みが感じられます。

千里山幼稚園はわずか一五年の短命に終わったようですが私も卒園生の一人です。入り口の階段左の高い間知ブロックの擁壁は一面に苔がむして年月を感じさせます。水源地と千里山神社はそのままにほぼ原風景を保っています。神社は開発会社が噴水の記念碑と同時に建てたものですがご祭神はなんでしょう。園舎の跡は片隅の用途不明の小屋以外は空き地です。ここに立つときさまざまな思い出が蘇り、園児の声が聞こえるようです。往時を懐かしむには何も建っていないのが幸いです。この幼稚園では藤井、谷川両先生によくかわいがってもらったことを懐かしく思い出します。以上、ほんとに簡単な二〇〇六年のスケッチです。





口羽竜二氏：千二小・吹田一中・茨木高・京都大学工学部建築学科・竹中工務店設計部・住宅開発部

## 住みよいまちをめざして

### 千里山駅周辺整備事業

事業に伴う都市計画の変更原案の説明会を開催

市は、都市再生機構による千里山団地の建て替え計画に合わせ、千里山駅周辺の新しいまちづくり、駅前の顔としての計画づくりを進めています。平成17年7月から、千里山駅周辺まちづくり懇談会を開催し、千里山駅周辺のまちの将来像について話し合いを続けています。懇談会の意見や関係機関との協議などを踏まえ、駅周辺の都市基盤施設の計画づくりに取り組んでいます。関連して、都市計画の変更の予定をしています。今後、駅西側についても計画づくりを進めていきます。◆問い合わせ／都市整備室(0664・4・1000)。

### 千里山駅周辺まちづくり懇談会が まちづくり提案書(駅前空間編)を提出

同懇談会は、千里山駅東側の駅前空間の交通広場(人の広場を含む)や自転車駐車場、公共施設・商業施設などのイメージや配置などについて話し合ってきました。これらを提案書としてまとめ、1月18日に市長に提出しました。現在は、同駅西側について話し合っています。

### 計画している

#### 千里山駅東側の主な整備内容

●都市計画道路千里山佐井寺線

(皇が丘工区・松が丘工区)

幅員 12mから19m

延長 約710m

●(仮称)千里山跨線橋線

幅員 12m

延長 約180m

●駅前交通広場 面積約2700㎡

●自転車駐車場 約1300台

●雨水管渠整備

●無電柱化(千里山佐井寺線など)

●踏切道の歩行者・自転車の専用化

●都市再生機構による団地の建て替え



## 都市計画変更の内容

都市計画道路千里山佐井寺線(星が丘工区)の計画線を現道から団地側へ拡幅し、幅員を現行の12mから16～19mに変更する予定です。また、駅前交通広場を設けて、千里山佐井寺線の起点を駅前交通広場からとする変更を予定しています。さらに、これに伴う用途地域などの変更も予定しています。都市計画の変更は7月ごろを予定しています。

このページは、18口羽竜二氏をご提供くださった吹田市報平成19年3月1日号です。原文は縦A4なので、横A4に組み替えたため、活字の大きさが一部変わっております。